

東日本支部だより

2014年11月15日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

**** 定例研究会のお知らせ ****

今後の例会予定

下記の日程で例会を予定しております。ホームページには要旨も掲載しておりますので、併せてご参照ください。ふるってのご参加、お待ちしております。

第 81 回 12 月 6 日 (土) 於：東京藝術大学
特別企画、研究発表。

*詳細は下記をご覧ください。

第 82 回 2 月 7 日 (土) 会場未定
研究発表ほか。

*1 月下旬にお知らせいたします。

第 83 回 3 月中旬予定
卒・修論発表。

◆東日本支部第 81 回定例研究会

時 2014 年 12 月 6 日 (土) 13 時 30 分～16 時 40 分

所 東京藝術大学音楽学部 5-109 室 (5 号館 1 階)

(JR 上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

※藝大校舎にはセキュリティーロックが導入されています。例会にご出席の方は、13 時 10 分から 13 時 30 分にお越しください。

○特別企画

「異文化接触と音楽

—ミャンマーにおける西洋楽器の受容を例に—

発表・進行：丸山洋司

(上野学園大学、東京藝術大学)

講演・演奏：ウ・イ・ノエ U Yee New

(ヤンゴン文化芸術大学客員教授)

通訳・演奏：ス・ザ・ザ・テ・イ Su Zar Zar Htay

Yee (東京藝術大学大学院)

○研究発表

「常磐津節《槍持奴》・《月の辻君》復曲の試み

—榎茂都流に残された三味線譜による—

発表・演奏：前原恵美 (有明教育芸術短期大学)

常磐津文字兵衛 (常磐津三味線演奏者)

解説：配川美加 (放送大学)

杵屋佐之義 (長唄三味線方)

司会：茂手木潔子 (日本大学)

* * * * *

★定例研究会発表募集（2月例会）

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、Fax、E-mail）を明記の上、本誌末尾記載の東日本支部事務局あて、お申し込み下さい。2月例会での発表希望は11月20日必着にてお願いいたします。なお、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

* * * * * 定例研究会の報告 * * * * *

◆東日本支部第78回定例研究会

時 2014年5月17日（土） 14:00～16:30

所 洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン

1階ホール

通訳 早稲田みな子（東京藝術大学）

司会 茂手木潔子（日本大学）

<講演と演奏>

“Historical Development of Contemporary Sarode Performance”

（現代サロード演奏の歴史的展開）

〔出演〕 David Trasoff

（サロード奏者、アメリカ合衆国）

〔賛助出演〕 逆瀬川 健治（タブラ奏者）

（要旨：早稲田みな子）

アメリカ合衆国、ロサンゼルス在住のサロード演奏家・音楽学者のデイヴィッド・トレソフ氏を迎えての例会が開催された。氏は、故アリ・アクバル・カーンの弟子としてサロードを学び、演奏活動・教育活動に従事するほか、カリフォルニア大学サンタバーバラ校で音楽学博士号を取得し、研究活動も行っている。北インド古典楽器としてはシタールがよく知られているが、サロードはあまりお目にかかる機会がなく、知名度も低い。今回はサロードという楽器の構造や歴史を学び、またその音色を堪能する貴重な機会となった。例会は三部構成になっており、第一部は、北インド古典音楽（ヒンドゥスターニ音楽）の概要とサロードの基本的な構造・特徴の説明とデモンストレーション、第二部は、サロードの歴史的展開に関するレクチャー、第三部が演奏であった。第一部と第三部では、タブラ演奏家の逆瀬川健治氏が賛助出演し、タブラに関する説明とデモンストレーションも加えられた。

第一部では、まずインド古典音楽の核であるラーガ（旋法）とターラ（リズム型）について、そしてそれらがすべて発声によって表現されることが説明された。発声することが旋律型やリズム型を内面化する手段として重要であり、それにより古典音楽の基礎・即興演奏の基盤が修得される。サロードという楽器については、指板が金属製であることにより、独特のスライド音が発せられること、旋律弦の他にたくさんの共鳴弦があることで、豊かな響きが得られることなどが、デモンストレーションとともに説明された。ドローンは、終始 iPhone のアプリケーションを使って流されていたが、インドでもこれが一般化しているようだ。

第二部のレクチャーでは、サロードが現在の形態に至るまでの歴史が紹介され、現在使用されているサロード

が、多くの現行の西洋芸術音楽の楽器よりもずっと新しいものであること、そしてこの現代サロードで演奏される今日の音楽もまた、この楽器の成立以前にはあり得なかったことが明らかにされた。サロードの起源はアフガニスタンのルバーブで、それがパサーンという部族の移住によりインドにもたらされ、20世紀初頭の30～40年間の間に北インド古典音楽演奏にふさわしいように変容した結果、現在のサロードが生まれたという。

第三部では、逆瀬川氏のタブラとともに、サロードによる古典音楽の演奏が披露された。現代インド楽器としてのサロードの成立を学んだ後に聞く演奏は、新しいものの中に生きる伝統として新鮮に響き、古典音楽の概念を再考させるものだった。

(傍聴記：小日向英俊)

久しぶりのインド音楽レクチャーデモンストレーションで、北インドの楽器サロードについての講演と演奏を聴いた。特別講師トレイソフ博士は、サロードの巨匠アリー・アクバル・カーン創設の音楽大学 (Ali Akbar Music College) でインド音楽を米国で学んだ。毎年のようにインドでも演奏を行っている。また伴奏のタブラ奏者逆瀬川健治氏は日本人としてタブラの長い経験を持つ。この例会は、非南アジア系奏者によるインド伝統音楽の演奏となり、インドの音楽が異文化の地に根を張りつつある今の時代を体現する形となった。

楽器や音楽家の歴史についての講演と生演奏で構成された例会は、サロードを初めて聴く参加者にも、インド楽器や音楽の歴史に興味を持つ専門家にも、十分に手応えのある実り多い時間となったに違いない。楽器の詳細に関するものなど、盛んな質疑もあった。また、氏の来日を様々な形で支えた当学会員の協力に感謝したい。

◆東日本支部第79回定例研究会

時 2014年6月7日 (土) 14:00～16:30

所 有明教育芸術短期大学 301 教室

司会 前原恵美 (有明教育芸術短期大学)

○博士論文発表

1. 宗教芸能バジャナ・サンプラダーヤの変容

—楽曲レパートリーに着目して—

小尾淳 (大東文化大学大学院)

(発表要旨)

本論文の目的は、南インド、タミル地方の古都タンジャーヴールの宗教芸能「バジャナ・サンプラダーヤ」の楽曲レパートリーに着目し、現地の社会的動向と関連付けてその変容を明らかにすることである。

「バジャナ・サンプラダーヤ」とは、「讃歌の伝統」の意である。ここでの「讃歌」とは、主に「神の御名を唱えること」に重きを置いた一連の楽曲群「ナーマ・キールタナ」を指す。芸能の様式は13-17世紀に西インドで盛んに行われた、マラーター聖者(サント)が歌を交えて民衆に教えを説く宗教実践「キールタン(神の名号・短句の詠唱)」から影響を受けているといわれる。17-18世紀、マラーター王朝のタンジャーヴール統治期にキールタンがタミル地方に伝わり、19世紀初頭に祭礼体系として生まれ変わった。担い手の男性バラモンは「バーガヴァタル」と呼ばれる。

本論文は序論と結論を除き6章から成る。第1章では本芸能の概要として、思想・様式・実践機会・音楽的側面について詳述した。

第2章では本芸能の核となるインド中世のバクティ(信愛)運動期の楽曲レパートリーについて論じ、その

特徴を抽出した。

第3章ではタンジャーヴール・マラーター時代のレパートリー形成と本芸能の成立までを論じた。当初は歴代の支配者が庇護したテルグ語、サンスクリット語の作品のみで構成されていたことを確認した。また本芸能の構造上、類似の楽曲であれば置き換えが可能であることが後世の担い手に再解釈の余地を大きく残したと仮説を立てた。

第4章では英領時代の楽曲レパートリーを検討した。19世紀後期から隆盛したタミル語音楽運動の影響により現地の主要語のタミル語作品が多く創られ、当時出版され始めたバジャナ・サンブラダーヤの歌集にも取り込まれていったことを明らかにした。

第5章では独立インド時代のレパートリーを検討した。バジャナの実践機会の増加を背景に民間に担い手が拡大し、バジャナ・サンブラダーヤの普及が活発化した。歌集の内容によって差別化が図られ、これまでにない大量の作品が追補されたことを指摘した。

第6章では1990年代以降曲レパートリーを検討した。日常的な実践が減少する中、若手により時間を短縮したコンサート形式が導入され、基本に忠実なレパートリーの重要性が提唱された。

以上、時代の趨勢に合わせ多様なレパートリーが「担い手本位」に追補されてきた過程を明らかにした。芸能の変容は各担い手による「伝統」の再解釈の結果であると結論付けた。

(傍聴記：小日向英俊)

本研究は南インド・タミル・ナードゥ州の宗教芸能バジャナ・サンブラダーヤの19-20Cにおける変容について、楽曲レパートリーの観点から考察したものである。

芸能の名称は「讃歌の伝統」の意であり、西インドの

芸能キールタンがタミル地方に伝わり、19C初頭にナーマ・シッターンタ（神の名号の教義）の信奉者が祭礼体系とし、現在の様式になったと説明があった。発表は、博論の中で楽曲レパートリーから芸能の変容を考察した部分であり、歴史、実践者（バーガヴァタル）、楽曲レパートリーの変遷を扱った。意図は、この芸能の変容過程において、担い手たちの独自性により相互差異化が図られたことを分析から示し、変容の理由を担い手たちの「伝統の再解釈」の結果と結論することであった。

フロアへの背景説明に時間を割いたため、発表の中心部分が時間切れとなったことが悔やまれる。また先行研究リストもレジюмеで確認できればよかった。フロアからは、発表者が使用した用語「担い手」の定義について質問があった。

2. 伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義

—小学校における実証的研究を通して—

山内雅子（東京学芸大学大学院）

(発表要旨)

本研究の目的は、伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義を、小学校における実証的研究を通して明らかにすることである。即ち、日本語を話す日本の子どもにとって、日本語の音声表現を基盤とした声による歌唱指導が、どのような教育的意義をもつのかということ、音楽的成長、並びに人間的成長の側面から子どもの変容を通して明らかにしていくものである。

第1章で、日本の音楽科教育の歴史における児童発声の課題を整理する中で、「日本の音声言語を基盤とした声」は、①どのような音声メカニズムか(2章)、②どのような指導法で一般化されるか(3章)、③どのような音楽的、

人間的成長の可能性をもつか（4章・5章）の3点を本論文の課題として示した。

音声メカニズムについては、日本語の音声表現を基盤とした声の特徴を、音声生理学的見地、並びに音響学的見地から検討した。音声分析を通しては、伝統的な歌唱の声は「話し声」の倍音成分を一層卓立したものであることを示した。そして、明治以来批判の対象となってきた「怒鳴り声」「叫び声」と「地声」は、スペクトルの包絡が異なり、「怒鳴り声」「叫び声」は「地声」とは別の声であることを示した。

指導の一般化については、長唄指導の事例を示しながら、一般的な音楽教師も、適切な音源を用いて、歌うときの姿勢と発声の仕方についてポイントを押さえた指導を行うことで、長唄の歌唱表現の指導を行うことができることを明らかにした。

音楽的・人間的成長の可能性については、伝統的な歌唱を生かした歌唱活動は、他の曲種の表現にも生きて、子どもの音楽性や歌唱力を高めていくものであること、ならびに、日本語を話す日本の子どもならどの子にも容易にできる伝統的な歌唱を生かした歌唱活動は、子どもに自己肯定感や集団の所属意識を育て、健全な成長や、好ましい学級集団の育成に寄与することを述べた。

児童発声に関する音声生理学的な解明は、まだ緒に就いたばかりである。音声生理学の分野と音楽教育の分野が連携を図り、児童発声について科学的に解明していくことが、今後の課題である。

（傍聴記：澤田篤子）

現行の中学校学習指導要領に「長唄や民謡など」の「伝統的な歌唱」が盛り込まれ、教員養成段階で洋楽の唱法を基礎としてきた中・高等学校の大半の音楽科教師はすでに課せられている「和楽器」以上にその指導を困難と

感じている。発表者は小学校教育の場で「伝統的な歌唱」、および学習指導要領に言う「自然な発声」による指導という一見相反するかのような課題の克服に長年向き合ってきた。これらの指導実践事例、および和洋両様の歌唱を経験してきた児童の音声メカニズム、という音楽教育・音声生理学の双方向からの分析結果に依拠した本発表はまことに時機を得たものであった。

フロアからは発表者の実践内容を現場に反映させるための方法、音声生理学的見地の根拠となる理論などについて質問がなされた。これらの問いより、小学校から中学校に連なる指導の検討や発達段階ごとの発声のメカニズムの解明といったさらなる課題が見え、また「伝統的な歌唱」に対して本学会が果たすべき役割についても考えさせられた。

3. クルグズ共和国におけるコムズの変遷

—民俗楽器から国のシンボルへ—

Umetbaeva Kalyiman（東京芸術大学大学院）

（発表要旨）

本論文の対象としたのは、今日クルグズを代表する国民的な三弦楽器、コムズ（komuz, комуз）であった。コムズは、旧ソヴィエト社会主義共和国連邦時代から現在に至るまで大きな変化にさらされてきた。本研究の目的は第一に、ソ連時代から現在までのコムズの変遷について、楽器の構造やそのレパートリー、演奏技法、教育などに焦点を当て、伝統的なコムズとソ連時代に改良されたコムズがクルグズにおいてどのような状況にあるのか、特に両者が教育機関の中でどのように教授されているのかについて、比較考察することであった。第二に、伝統型コムズと改良型コムズの楽器が併存している現況を踏

まえ、ソ連時代に改良型コムズが作られるようになった経緯、そしてソ連崩壊後にはそれが廃れ、今日の伝統型コムズが優勢になるまでの経緯を明らかにすることであった。また第三に、コムズの楽器そのものとその音楽がどのように変遷したのかを、音楽的・社会的背景から検討することであった。

本論文では全体の考察の前提としてクルグズ共和国について詳述し、クルグズ民族楽器の全体像を概観した。そして、ソ連時代に行われた楽器改良の背景、目的とその方法について述べた。その結果を、同じくソ連諸国であったカザフスタンとトゥヴァ共和国で行われた楽器改良の経緯と比較し、さらに、その特徴と結果から、20世紀に世界中で行われた民族音楽文化の西洋化の中でソ連圏の音楽文化がどのように位置づけられるかを検討した。

また、ソ連崩壊後から現在に至るこの22年間に渡り伝統的なコムズが積極的に演奏されるようになった事情を論じた。しかし、近年のクルグズ民族音楽の「復興」は、決してソ連成立以前のクルグズ民族音楽ではない。なぜなら、ソ連成立後よりクルグズの音楽は徐々に近代化し、楽器の改良にともないコムズの演奏様式や、音楽教育のあり方にも少なからず影響が及んだからである。2011～12年に現地で行ったコムズの教員、製作者、演奏家などコムズに携わる人物のインタビューを通して、民族音楽と楽器が変化したことや、現在コムズが人気を集めている要因について考察した。その結果、改良型コムズそのものは批判されていても、ソ連時代にこの楽器が誕生したことで、伝統型コムズの重要性が喚起され、さらにソ連時代に伝統型コムズが抑圧された経験があったからこそ、コムズの復興に繋がっているのだと結論づけた。

(傍聴記：瀧知也)

中央アジアのテュルク諸語の日本語表記は、ソ連崩壊後民族語の発音により近く記述される傾向にあり、本論で「クルグズ」と掲げられたことは日本の中央アジア研究の進展に沿うもので重要だと考える。

氏の発表は、旧ソ連諸民族の伝統音楽における楽器改良の事由と実態、および独立前後の音楽教育における実践の推移状況の理解に寄せて、一定の思考軸を得られる意義深い内容であった。調弦法の異なる伝統型と改良型双方のコムズ奏者である氏自身が、旧ソ連時代末から習得した時期と現在の音楽専門学校における修練の状況を比較されている点でも興味深く伺った。

フロアからはソ連黎明期のA.ザタエーヴィチの楽器形体の測定値のみを以て改良型と比較し得るのかという疑問、改良楽器の製作者、また演奏の担い手に関する質疑等が向けられた。

旧ソ連に属した諸民族の伝統音楽をみる場合、楽器改良の事実は看過できない。その経緯と伝統への回帰についての詳述は、他の中央アジア撥弦楽器とその音楽を考察する上でも非常に有益なものであろう。

4. サハの口琴ホムス音楽の復興と再活性化

山下正美 (お茶の水女子大学大学院)

(発表要旨)

ロシア連邦サハ共和国に居住するサハ(旧称ヤクート)では、口琴ホムスがその代表的な民族楽器となっている。本研究は、ソヴィエト解体前後から本格化したホムス音楽の復興と再活性化のプロセスのなかで、中心的な役割を果たしてきたホムス奏者たちに注目し、彼らの諸活動の蓄積がホムス音楽の伝承と伝播のしかけとして今日ど

のように機能しているのかを考察したものである。

ホムスは、ロシア革命前には主として女性が家庭で演奏する楽器であったが、ソヴィエト時代に始められたアマチュア音楽活動を通して、コンクールやフェスティバルといったステージ上で演奏される楽器へと変容した。アマチュア音楽活動で演奏経験を積んだホムス奏者たちは、1980年代末から国内外での演奏活動に加え、口琴をテーマとする学術会議の実施、演奏技法の体系化、ホムス関連書籍の執筆・発行といった活動に従事してきた。1990年に開館した世界民族口琴博物館は、そのような活動家の1人でホムス音楽を復興した人物として高く評価されているイヴァン・アレクセイエフのコレクションを基にしており、今日では口琴に関するあらゆる情報が集積・保存・発信される、伝承と伝播のしかけとして機能している。

いっぽう、ソヴィエト時代に導入された専門的音楽文化（西洋音楽文化）もまた、今日のホムス音楽のあり方に影響を残している。その創設過程では、オペラ劇場の建設とそのレパートリー創出のために、「初めてのヤクーートの専門的作曲家」M. N. ジルコフ（1892-1951）が、サハの民俗音楽研究を行っており、ホムスもステージ上で調性的な音楽を集団で演奏できるよう改良すべきだと主張していた。そのすべてが直接的に実現されたわけではなかったが、2011年6月に首都ヤクーツク市で行われた第7回国際口琴大会は、オペラ・バレエ劇場を主たる会場として行われ、夏至の頃に開かれる馬乳酒の祭りウシアフとの同時開催というかたちをとった。ここでは1344人ものホムス奏者が同時にサハの民俗舞踊オフオカイの旋律を集団で演奏し、世界一大きな口琴アンサンブルとしてギネスブックへの登録を果たした。ホムス音楽の復興・再活性化の背景には、ホムス奏者たちの不断の努力と諸活動の蓄積、専門的音楽文化建設における諸

産物の有効活用があり、それらが今日ホムス音楽の伝承と伝播のしかけとして有効に機能していると結論づけた。

（傍聴記：直川礼緒）

研究の題材として取り上げられることの非常に少ない、サハの口琴音楽をテーマにしたことは評価に値する。しかしながら、冒頭、サハ民族の伝統文化や言語に関する紹介もなく、1632年に始まる「サハ共和国」の歴史（帝政ロシアに編入）から説き始めるのを聞き、問題点のありかを正しく把握していないのではないかと感じた（例えるなら、日本の音楽は、黒船来航に始まるのではない）。

その疑念は当たり、表題のような大きなテーマを扱うにもかかわらず、ホムス音楽の歴史の全体像を正確に理解しておらず、諸情報の引用の明示がない（その必要性もわからない～「一般的な用語だと思っていた」）こと、事実と異なる不適切な図版のキャプションなどが目に余る。「アマチュア的音楽活動」「専門的音楽文化」など、ソヴィエト的な概念（それが無理に伝統音楽にあてはめられている点も含め）を、たまたま目についたロシア語文献から、無検証・無批判につなぎ合わせただけ（しかも重要な語彙の誤訳、事実誤認、原因と結果の取り違え、本筋の見誤り、恣意的な事実の歪曲あり）の、重要な諸問題点に対する独自の考察に欠ける（その所在にさえも気付かない）、稚拙な発表であった。

それぞれの点について、ここで検証するには紙面が足りず、詳細は、来年度以降の「東洋音楽研究」誌に寄稿させていただく予定である。

なお、記譜の困難な、即興による「音色の変化」を主要素とするホムス音楽を、どのように「楽曲分析」したのか、その実際には全く触れられなかったことも残念であった。

◆東日本支部第 80 回定例研究会

時 2014 年 7 月 5 日 (土) 午後 2 時～4 時 20 分
所 東京芸術大学音楽学部 5-301 室 (5 号館 3 階)

司会 配川美加 (放送大学)

○研究発表

1. 雑誌『三曲』(1921-1944)の演奏会情報にみる邦楽演奏の場の変遷

福田千絵 (お茶の水女子大学)

(発表要旨)

本発表は、邦楽雑誌『三曲』に掲載された三曲(地歌・箏曲・尺八)の演奏会情報にもとづいて作成中の演奏会データベースの概要を紹介するとともに、演奏会の種類を分類し、年代による邦楽演奏の場の変遷を考察することを目的とした。

『三曲』は 1921 年 7 月に尺八家藤田俊一(筆名: 鈴朗)によって創刊され、雑誌統制による終刊の 44 年 5 月まで一貫して藤田の編集により発行された。終刊後は、後継誌として同じく藤田が編集に加わり、『日本音楽』が同年に 2 号発刊され、終戦を迎えた。『三曲』および『日本音楽』に掲載された演奏会情報を抽出した結果、演奏会の件数は、沖縄を除く全国、旧外地、米国など、約 1 万件にのぼった。この演奏会情報は、当時の日本人の活動地域を広く網羅し、継続期間が長期にわたる点で、邦楽演奏会に関する稀有なデータといえる。

この演奏会情報にもとづくデータベースには、開催日時、演奏会名、会場などの基礎情報ほか、演奏会の種類と演奏された種目の分類を掲載している。この年代の邦楽演奏会に関して、平野健次氏が温習会形式と鑑賞会形式に大別しているが、『三曲』には、多種多様な趣旨の演奏会が掲載されており、本研究では、目的別の種類分け

に重点を置いた。

発表においては、温習会、新曲発表、連合演奏会、演奏旅行、舞踊の会などの種類別の分類について、グラフを用いて年代による変遷を考察した。演奏会の件数と種類の多様性が 1930 年頃に頂点に達し、その後、社会情勢に応じて、慰問・献金やコンクールなど新たな演奏機会が設けられた一方で、全体としては戦況に応じて演奏機会が狭められていった。

さらに、雑誌『三曲』以前の温習会との比較として、明治後期の演奏会に関する野川美穂子氏の研究、および温習会の実施方法についての芸談を考察した。その結果、『三曲』の年代は、椅子席のホールでの演奏会が定着し、洋楽やほかの邦楽種目と混合ではない、三曲を中心番組とする公開演奏会が主流となり、聴衆と演奏者にも変化が生じており、近代的な発想にもとづく演奏状況の変化が読み取れた。

以上のように、演奏会の年代による変遷を考察した結果、明治期に萌芽がみられた近代的な音楽鑑賞の場が『三曲』の時代には全国的に定着し、さらに戦争の影響を受けながらさまざまな演奏機会が設けられたことが明らかになった。

(傍聴記: 加納マリ)

雑誌『三曲』は地歌・箏曲・尺八の分野に関する雑誌であるが、当時の三曲を中心とする演奏会記事が豊富に掲載されており、1 万件を超える情報から、発表者はデータベースを作成中。この発表はデータベースの初公開であった。

例会当日配布された資料には、雑誌『三曲』の巻末に掲載された集報欄の演奏会の予告と報告の例が 2, 3 挙げられ、その例には演奏会の日時・場所・曲目・演奏者・入場料などが明記されていた。できあがったデータベー

スから何を読み取るかがこうした研究のテーマであり、今回は特に「邦楽演奏の場の変遷」に焦点を当てたものになっている。三曲界だけでなく、日本の伝統音楽の分野では弟子たちの発表会に当たる温習会形式の演奏会が多いが、20世紀に入ると次第に鑑賞会形式の演奏会に変化していく。その変化が雑誌『三曲』の時代に定着し、日本各地に広がったと結論付けた。フロアからも声があったが、今回触れられていないこの時代の演奏家たちや曲目なども今後ぜひ取り上げてほしい。

○研究報告

2. 日本軍政下のジャワにおける唱歌

—グラフ雑誌『ジャワ・バル Djawa Baroe』を

素材に一

丸山彩 (立命館大学)

織田康孝 (立命館大学大学院生)

(発表要旨)

本研究は、太平洋戦争期に日本の軍政が敷かれたジャワにおける唱歌について、その特徴、性格を明らかにするものである。日本軍政下の南方地域では、映画とともに音楽も宣伝工作の一部に用いられていた。しかし、当該期のジャワにおける歌については、日本の唱歌、現地の歌ともに、これまで詳細に言及する研究は存在しなかった。そこで、本報告においては、軍政下のジャワで発行された雑誌『ジャワ・バル』誌上に掲載された歌を見ていき、それら特徴を整理することを目的とした。『ジャワ・バル』は、ジャワ島に進出した朝日新聞社によって、軍政当局の指示を受け、1943年1月1日に創刊したグラフ雑誌である。写真を多く掲載し、幅広い年代が読みやすいように編集され、日本語とインドネシア語(マレー

語)の両言語で記事が書かれている。『ジャワ・バル』全63号中、50曲の歌が紹介されており、その多くは歌詞とともに五線譜、数字譜を掲載している。

『ジャワ・バル』に掲載された歌は、日本の歌とジャワで新たにつくられた歌の大きく2つに分けられる。前者には、大東亜共栄唱歌(『大東亜共栄唱歌集』の唱歌)や祝日大祭日唱歌などが含まれる。後者は、1943年末よりジャワにおいて、主に啓民文化指導所によって日本人の指導の下、制作されたものである。『ジャワ・バル』誌上の歌を概観すると、まず、大東亜共栄唱歌の移植から始まり、続いて、祝日大祭日儀式唱歌をはじめとする日本の歌の移植、そして、日本人の指導の下、インドネシア語(マレー語)の歌を製作する、といった流れを確認することができた。そして、本報告においては、以下の3点を指摘した。第一には、朝日新聞社が進出したジャワは、大東亜共栄唱歌が普及すべき格好の土地であったこと。第二には、大東亜共栄圏の名の下に、人民教化のために歌が利用されたこと。第三には、啓民文化指導所によって作成された歌は、主に成人を対象にしたものであることから、学校教育において用いられた可能性は低いということ。また、報告ではフロアから、報告題目にも使用している「唱歌」という用語が何を示すものであるのかという指摘を受けた。今回の調査では、『ジャワ・バル』誌上の歌が学校教育(唱歌教育)に直接的に結びつくわけではないことがわかった。今後は用語を再検討したうえで、対象とするメディアを広げて考察していくことを課題としたい。

(文責:丸山彩)

(傍聴記:川口明子)

本研究は、日本軍政下にジャワ島「原住民」対象に発行された写真入りの雑誌『ジャワ・バル』(1943~45)の復

刻版を史料とし、掲載された唱歌の分析・考察から当時の「宣撫工作」の一端を明らかにし、大東亜共栄圏構想下の音楽状況や、さらに当時のジャワにおける音楽活動の一端を紐解くことをねらいとしている。

質疑では、当時のシンガポールでの事例との比較、日本人とインドネシア人作曲家の関係や音楽工作の普及状況、数字譜の記譜等について活発な討議がなされた。その中で、題目中の「唱歌」の概念に対して、当時使われた様々な用語（歌、唱歌、大東亜共栄唱歌、国民歌謡、国民の歌、歌曲、日本歌曲、新民族歌曲、大衆歌など）との使い分けや、それに対応するインドネシア／マレー語の用語との関係等の吟味が不足との指摘があり、今後の課題とされた。しかし、これまでほぼ手つかずの領域に、若い2人の研究者が音楽とインドネシア語というそれぞれの専門を生かして共同で取り組んだ姿勢と意欲は、高く評価できる。継続研究に期待したい。

* * * * *

会員の声

◆文化庁助成アートマネジメント人材育成関連事業

公開シンポジウム「音楽批評のボーダーレス化：日本の伝統音楽と現代音楽との邂逅」

日時：2014年12月22日（月）17:00～19:00

会場：お茶の水女子大学 共通講義棟2号館201室

出演：（パネリスト）徳丸吉彦、近藤譲、澤田篤子、奥山けい子、檜崎洋子（司会）永原恵三

※参観無料、事前申込不要。詳細はHPをご覧ください。

<http://www-c.cf.ocha.ac.jp/atoma/>

（黒川真理恵）

◆企画展示「邦楽器が受け継ぐ 技・形・音 こめられた丹精」

邦楽器の製作に焦点をあて、楽器製作者の実演や関連楽器の演奏も交えた展示です。

会期：2014年11月20日（木）－11月30日（日）

会期中無休、午前10時30分－午後4時30分

（入館は午後4時まで）

会場：東京藝術大学大学美術館 正木記念館 1階

主催：東京藝術大学

企画：小泉文夫記念資料室

※参観無料、詳細はHPをご覧ください。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/exhibit/2014/hougak>

[ki/hougakki_ja.htm](http://www.geidai.ac.jp/museum/exhibit/2014/hougakki_ja.htm)

（植村幸生）

会員の声 投稿募集

1. 次号締切：2015年2月10日（3月初旬発行予定）

2. 原稿の送り先および送付方法：

学会本部事務所（郵送、Faxまたはメール）

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

Fax: 03-3832-5152、 E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数と書式：25字×8行以内（投稿者名を明記）

4. 内容：会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

編集後記

今号は5月例会のインド音楽の講演と演奏に始まり、6月例会の博士論文発表と7月例会の発表を中心にお届けします。今号が現行の支部委員体制での最後の支部だよりとなります。例会の発表要旨や傍聴記をはじめ各種案内など原稿の執筆にご協力くださった方々にあらためて御礼申し上げます。支部だよりの編集は、これまでの担当者の方々が整えた詳細なマニュアルのおかげで滞りなく進めることができました。私自身は編集作業のなかでいろいろな会員とやりとりでき、楽しくもためになった二年でした。次号から大会後の新しい委員へバトンタッチしますが、引き続きさまざまな形で関わっていきたいと思います。(K)

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：野川美穂子、尾高暁子、茂手木潔子、

金光真理子、福田千絵、田辺沙保里

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com